

備前市指定無形文化財

「備前焼の製作技術」保持者

佐藤 伊助（苔助）（1941年～）伊部

平成25年10月25日指定

古陶磁収集家の父の影響で、短大卒業頃から焼き物を研究しました。



ロクロ物の茶陶・酒器・食器のほか細工物も手掛けています。温もりのある作品を心掛け、新しい造形にも意欲を見せています。

柴岡 紘一（1941年～）伊部

平成25年10月25日指定

備前陶芸センター第1期生

となり陶芸の道へ。

大振りの皿など食器を中心に、生活に身近な備前焼を多く手掛けています。



独特の温もりのある土味・焼き味を大切にし、穴窯で焼成した明るい作風が特徴です。

鈴木 黄式（1942年～）伊部

平成25年10月25日指定

細工物を得意とした鈴木黄哉氏の長男。

ロクロ・手びねり・板作り

などの技法により、壺・花入・



茶器・酒器・食器などのほかに干支の置物・香炉などを手掛けています。近年は強い還元焼成による青備前の花器・大皿を追求しています。

森 泰司（1947年～）伊部

平成25年10月25日指定

ロクロによる成型が中心で、伝統を重んじながら新鮮味のある造形や焼成を追及。近年では酸化と還元との二度焼きにより、一つの作品に異なる表情を見せる壺などを手掛けています。



小西 陶藏（1947年～）伊部

平成25年10月25日指定

2代目小西陶古氏の長男。

茶陶などの伝統的な作陶のほか、近年では曲線状あるいは鋭角状の刻文が入ったオブジェ風の斬新な花器や鉢にも挑戦し、備前焼に新風を吹き込んでいます。



川端 文男（1948年～）伊部

平成25年10月25日指定

主に手びねりや紐作りで自由な造形を目指しています。近年では、原土に含まれる鉄分等を土肌の表情として生かす「自然練り込み」の技法で花器や大皿を手掛けています。また穴窯での焼成により、グラデーションを表現することに成功しました。



見附 文雄（1939年～）福田

令和6年10月1日指定

関西大学経済学部卒業後、地元企業での7年の勤務を経て、のちに岡山県重要無形文化財保持者となる藤原建氏に弟子入りし、陶技を学びました。主にロクロ成形によるうつわの制作を行っています。師から特に学んだという焼成を重視しています。



木村 宏造（1941年～）伊部

令和6年10月1日指定

備前焼窯元六姓で御細工人を務めた木村長十郎を始祖とし、十三代目木村長十郎友敬の2男・木村一陽（好雄）氏が本家・木村興樂園から独立して一陽窯を創設しました。宏造氏は一陽氏の長男です。



ロクロ物のうつわを中心に制作。特に「備前焼本来の姿」として日常使いの食器に力を入れています。個人作家としても個展の開催、公募展への出品等の活動を行っています。

そのほか、岡山大学教育学部特別教科（美術・工芸）教員養成課程における備前焼の非常勤講師（社）日本民芸協団公募展審査員、一水会陶芸部審査員、備前商工会議所副会頭等、幅広く備前焼振興に努めました。

木村 憲次（1942年～）伊部

（十七代）木村 桃山

／木村 陶々斎

令和6年10月1日指定

備前焼窯元六姓のひとつ、

木村家のうち桃蹊堂（とうけ



いどう）の先代当主。備前岡山藩細工人木村清三郎から数えて十七代目。昭和、平成御大典の謹製、昭和天皇、高松宮、伊勢神宮など宮内省、大禮使御用達を賜りました。

主に陶彫、茶道具を手掛けています。代々受け継がれてきた製法を重んじつつ、土づくりや焼成に独自の研究を盛り込んでいます。国際交流にも積極的で、長男の英昭氏（現当主・十八代木村桃山）とともに、海外からの見学者や土ひねり体験を受け入れています。

藤原 謙（1943年～）伊部

（三代）藤原 楽山

令和6年10月1日指定

岡山県重要無形文化財保持

者の二代藤原楽山の長男。ロ

クロ成形中心に伝統的な器

種から現代的なデザインのうつわまで幅広く制作

古備前の胡麻の美しさと追求すると同時に、初代

楽山から伝わる家伝「塩青」※にも注力しています。

現在も備前市伊部にて楽山窯 藤原備前堂を営んでいます。



※塩青とは塩を用いた焼成技法。「塩備前」ともいわれます。焼き上がり直前に窯へ塩を投げ込んで、青磁風の青灰色とツヤを出します。塩青には専用窯を用います。

柴岡 正志（1946年～）伊部

（三代）柴岡 香山

令和6年10月1日指定

大正元（1912）年に初

代・柴岡香山（米田）が創業

した窯元、柴岡陶泉堂の現当

主。二代目香山（強）は昭和58（1983）年に備

前焼部門で初の伝統工芸士に認定された一人。自

らも備前焼伝統工芸士に認定され、工芸士会の会

長も務めました。伊部と神石高原町の二拠点で備

前焼の制作と普及活動を行っています。



浦上 光弘（1946年～）伊部

令和6年10月1日指定

岡山県重要無形文化財保持

者で備前焼陶彫の第一人者の

浦上善次（ぜんじ）氏の3女

と結婚し、浦上姓を名乗って

います。柴岡陶泉堂の当主・柴岡香山（正志）氏

は義叔父にあたります。

師・善次氏に学んだ細工物の置物や、青灰色に

黒の襷のかかった「青備前」のほか、茶陶や大型

の胸像も手掛けています。成形にはロクロ、手び

ねり、型を用い、焼成も登り窯、角窯、ガス、電

気を使い分けています。



岡田 輝雄（岡田 輝）（1947年～）久々井

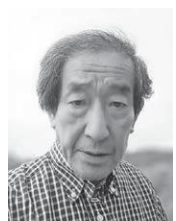
令和6年10月1日指定

師である藤原雄氏の大らか

な造形と焼成を引継ぎつつ、

「叩き板造り」等の新たな展

開を試みました。叩き板造り



とは、御影石片で土の表面を叩き締め、石片の角によって生じる直線と石目の文様をつくる、岡田考案の成形技法です。倉敷芸術科学大学では、藤原雄氏とともに開学当初から携わり、20年にわた

り教鞭をとりました。

小山 末廣（1948年～）伊部

令和6年10月1日指定

細工物を得意とした伝統工

芸士、初代小山一草（いっそ

う）氏の3男。高校卒業後、

伊部の窯元・陶正園※で修業。

岡山県重要無形文化財保持者の金重素山氏に薫陶

を受けました。

主にロクロ成形での茶陶を手掛けています。金

重素山氏の薫陶を受け、土のやわらかさを感じさ

せる造形と、古備前をほうふつとさせつつ大胆な

焼きが特徴。日本工芸会、岡山県美術展などへ出

品。古陶磁に明るく、長年備前焼陶友会の古備前

鑑定会委員を務めました。

※陶正園は、備前焼窯元六姓の木村家の分家。

大正2（1913）年創業。当主は木村陶峰（と

うほう）氏。備前市伊部の旧山陽道沿いに店



花房 壯一（1948年～）浦伊部

令和6年10月1日指定

細工物で知られる備前焼伝統工芸士の花房秀安（ひでやす）氏の2男。父の技術を継承するため陶芸の道に入りま

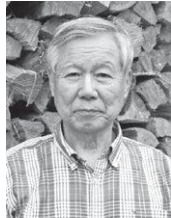


した。細工物では秀安氏同様に神仏や動物等を手びねり一点物で制作。同じ題材でも表情で世界観の違いを表すこと、躍動感を追求することを心掛けています。うつわには石目肌を取り入れています。

森 博昭（森 丁斎）（1949年～）伊部

令和6年10月1日指定

備前窯元六姓のひとつ、寺見家の家系。独創的な作品を目指し、ロクロや手びねりによる陶板や花入等を制作。焼成にこだわり、「釉襷（ゆうだすき）」を編み出し



ました。現在も日本工芸会中国支部展、岡山県美術展等への出品、岡山県内外での個展で発表を続けています。修業時代から古備前の研究、古窯の探訪を行い、備前焼陶友会の古備前鑑定委員を務めました。備前市伊部で長年ギャラリー森を経営。

柴岡 信義（1950年～）伊部

令和6年10月1日指定

柴岡陶泉堂の創業者、柴岡香山氏の孫。伯父の二代目香山氏と父一海（いっかい）氏に学びました。備前土の持ち



味を生かした伝統的な作風。ロクロ成形による花器や茶陶、タタキによる皿等を発表。日本伝統工芸展中国支部、岡山県美術展等で受賞多数。昭和56（1981）年日本工芸会中国支部展・支部長賞を受賞、受賞作品は、千葉県の茂原市美術館・郷土資料館に収蔵されています。

木村 日出夫（木村 玉舟）（1953年～）伊部

令和6年10月1日指定

細工物の名工十六代木村宗得（玄一）氏の長男。名古屋芸術大学では彫刻を専攻。卒業後、「長崎平和祈念像」で知られる北村西望・治禧父子に師事。その後、彫刻家の中村晋也に師事。

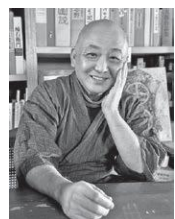


備前焼による陶彫に取り組み、日本陶彫会副会長、岡山県美術展彫刻部門の審査員等、彫刻分野でも活動。細工物においてもモデルの観察と一点物として作ることを重んじています。江戸時代の「白備前」および「閑谷焼」を研究、再興をはかり、毎年個展にて発表。

藤原 和（1958年～）穂浪

令和6年10月1日指定

備前焼作家で重要無形文化財（人間国宝）・藤原雄氏の長男。大学卒業後、帰郷し、作陶を開始。藤原家の伝統を



継承し、ロクロ中心とした器を手掛けてきました。一方で、ユーモラスな動物の細工物や、焼成前の陶土を用いた平面作品も制作。若手の備前焼作家とともにグループ展や茶会を開催、展覧会だけでなくオランダ・ライデン大学客員教授に就任する等、多方面で活動。祖父・父の個展および記念展、レリーフやオブジェ等のプロデュースを行い、現在では移築やメンテナンスの監修も務めています。

〔引用元〕

『備前市の文化財』令和4年3月

備前市教育委員会